

「地域に根ざし、人々の“生きる”を支えるために…」一人暮らしの寝たきり高齢者の“生きる”を支える取り組みの実践報告 ～「ふるさと訪問」を通してみえてきたもの～

尼崎市 訪問看護ステーションのむら 本荘 紀子（訪問看護師）
【共同研究者】安井直樹

「ふるさと訪問」とは、1985年頃に特別擁護老人ホーム等で個別支援の一環として広く実施された取り組み。日々の関わりの中で「どこか行きたいところは？」の問いに多くの利用者が「故郷に帰りたい…」「両親のお墓参りに行きたい…」と答え、施設も実現に向けた様々な条件整備を行った。

職員は、利用者を深く理解するいい機会となる。取り組みに際し利用者の生活歴や家族関係、故郷に対する思い、何よりもその人の歩んできた人生の重みを感じることが出来る。多くの職員は、認知症を含む要介護状態になってから利用者との関わりが始まる。人柄や人生の重みなどを感じられず利用者を粗末に扱ってしまうことが多にしており、虐待などに繋がる事例も少なくはない。「ふるさと訪問」の経験は、利用者に思いを馳せた支援に繋がることが期待され、施設の研修として位置づけられるところもある。

また、取り組みの実現にはご家族との協力が必要不可欠で、「施設の職員が協力してくれるなら…」「最後の親孝行に…」とご家族の決断にも大きく影響し、施設とご家族が実現に向けて準備、実施する形態がとられた。ご家族との共同の取り組みは、日々の連携にも活かされ、利用者を中心にご家族と職員が一緒になって支援する協力関係がより一層強いものとなる。

利用者の方は「“生きる”希望が持てること」「予定があること」は生活の中で大きな目標となる。実施に向けての準備や健康管理は“生きる”ことの重要な意味づけにもなり、利用者の生きる意欲につながる。

2016年10月、野村医院と地域生活支援ハウスのむらが初めて患者さんの思いを実現するため熊本県水俣市への「ふるさと訪問」に取り組んだ。「地域に根ざし、人々の“生きる”を支えるために…」の理念のもと、その実践を通して見えてきたものを検証し、患者さん、利用者さんの生活支援にどう向き合っていくのかを考えてみたい。